

手に入れてから病人が絶えぬとて困つて居らるゝ容子、私が參で勤めて見ませうと言ふ、先生大に喜び、さう出来れば三十兩位は出しても宜しいと車を頼み、其男を乗せて重國を持せて遣る、直ぐ立歸て則重は高金でも賣却は出来ざれど、品と品との交換ならいたしてもよい、五十圓添て呉れと申ます如何いたしませう、よろしい五十圓出さうと早速金子を渡して則重を受取、秘藏第一にして持歸つて之を鑑定家に見せた處、飛んでもない則重、小田原相州と云ふ平凡の刀であると云ふ評判、先生大に弱り切つた、吾等之を聞て名古屋の友人へ書面を遣り、重國を所望した處、彼の刀は、於南紀重國造とあり、裏銘が寛永二年三月日晚年の作で非常の上出来、大阪の商人が五十圓に附たれど賣らず、七十圓ならば譲りてもよしとの返事だ、是で吾等も閉口した、先生之を聞いていよいよ後悔して、ア、名古屋は人氣の悪い處だ

## ▲鑑定失敗(九)

本郷菊坂に中村大輔と云ふ、老人の刀商が有

つた、一日店前へ吳服郷則重の名刀と云ふ札を張出したから、吾等立寄つて見ると金銘で則重とある、併し其刀は少し反が高く、忠の工合と鋒子の形、何としても相州傳ではない、其儘にして歸つて翌月立寄つて則重は賣れたかと聞けば、駒込曙町の○田先生へ七十五圓で賣たと云ふさては○田君背負込だなど少々氣の毒に思つて、直ぐ○田氏を訪ねた處が、トキに見て貰ふ物がある、則重を一本手に入れたが段々審査して見ると少し疑はしいから、只今研究中だと例の則重を出した、僕も去月見た刀である、是は拵物らしい、相州傳らしい處が少し見えぬ殊に銘もあやしい様だ、中村大輔なら熱談して返したらどうかと言つたので、○田も急に嫌になり、直ぐ中村に掛合た處が、一割損でならばよろしいと云ふ事で刀を返した、處が世間は廣い、十二月の中旬になつて、下谷の研師の周旋で貴族院議員(奥州の田舎もの)がわざわざ見に来て、とうとう百圓で買つた、中村其翌日吾等が宅へ來て、あなたのお蔭で七兩二分○

田さんから貰つて、其上百圓に賣つた、あの刀は當春加賀から出て來たのを、二十圓で買つたので一年掛つて八十七兩二分になつた、まことに難有ふ存じます。

▲手討と辻切り 主人が吾家來又は町人百姓を切るのを手討とも或は成敗とも言つた、戰國時代には盛んにやつたもので、武田信虎などは手づから五十人餘も手討にしたと軍鑑にある、松隣夜話には謙信の手討が數人ある、信長もやつた、家康、秀吉、景勝、政宗、三代家光、水戸義公等を初め先づ手討をやらぬ大將は無い、舊幕の江戸時代でも吾家來中で物を盗だ者、主人の馬に供歸りの時密に乗つた馬丁、脱落した者、供先を外した者、主人に慮外した者、此等は主人が手討にしてもよいと極つて居た、手討は其罪を罰するのでは有るが、半分は刀を試すのである、武士は切味の知れぬ刀を差すを耻とした者で、新刀を求めれば必ず試す、此の試しに手討もあれば、死囚の胴を切つて試すともある、中には生胴と

云つて生た囚人を切て試すのもある、試し方に就ては次に述べるが此に辻切の話をしやう。

▲將軍の辻切 足利義輝將軍は三好、松永の爲に殺された人であるが、此義輝夜なく、都の辻へ出て往來の者を切つた、而して何日も重代の御刀を試さるゝなりと、或書に見えて居る、三代家光が辻切をしたと云ふ話は、『責而草』にも出て居る、其時代には又戰國の餘風が残つて居て、人を殺す事は、ベストの鼠を殺すと同一に思つて居たのであるから、怪しむに足らぬ、『寛明日記』に真柄新五郎と云ふ浪人、河内守國助の刀を以て辻切をしたが、芝の或町より石町迄の間に切殺した者八人、手を負はせた者十人、多き夜は二三十人も斬つたと云ふ、餘り甚しくなつて幕府は、寛永六年に之を制する爲め、町の辻へ辻番と云ふ者を置いて往來を警備したが、辻切は猶ほやまない、ので、八代將軍に成つて辻切致し候者は死罪に處すと嚴令し是より辻切が無くなつた。

▲辻切の實驗談 吾等が知人で、今八十歳許りになる老人、此人は筑波山の擧に與みし、又會津戦争にも寄手で戦功の有つた人であるが若い時に辻切をした實歴談がある、予先年控へて置いたから以下是を載せやう。

吾親友に梅村晋六郎と云つて、一刀流をよく遣ふ人があつた、桃井儀八等と共に新田萬次郎を大將として、勤王の旗を揚げやうと企てた處、新田氏が中途で變心したので同志は皆散亂し、其後梅村は小梅の鈴木重胤を斬つた、是は塙二郎、鈴木重胤、中村敬輔の三人が幕府の命を受けて、廢帝の先例を調べたと云ふ、風説があつたので之を信じて、長州人の伊藤とか山尾とか云ふ人が、塙を九段で殺し又梅村が鈴木を切つた、而して薄井と云ふ人が中村を殺しに行つたのも、多分其頃であらう、予は梅村が先刻鈴木を切つたと云ふ時に、淺草で逢つて共に酒を飲んで話したが梅村の云ふに初て人を斬つた時は、眼がボロとして霧の中に居

る様だが三人目位になると眼がツッキリとして太刀先も能く分る、拙者は十七八人斬つた足下も辻切をして腕を試すがよい、左もなければイガと云ふ時に役に立たぬ、然し切るなら武士がよい町人ではいけない、先方が刀を差して居ると、此方も其覺悟でやると言ふから、尊公は何の刃で切つたのかと聞いたら、上州では津田助直で遣つて大出来で有つたが、何ういふものか中途で折れて了つた、其後藤田小四郎に天正年號の祐定を貰つたが、是はよく切れる、又友人の東田が古刀の長谷部を差して居たが、是は曲つていけないと云ふ話であつた、一體辻切は新刀がよい、ソコで予は會津の兼光を差して居たから、此刀でやつて見やうと心に極めて其後濱町で一人切つた處、切損じて逃られたので、是は刀が悪いのだと思つた、それから又千住で旅人をやつた、其者は仙臺の飛脚らしい奴で、脇差を抜いて掛つて來た、此奴は大變と必死になつてとうとう切倒したが、何分刀の切味が悪いので、其刀を小林と云ふ男にやつ

て、同人から同田貫を貰つて兩國でまた切つた、是は重い刀でヤッパリ  
工合が悪い、又切損じて手を負はせた許り、然るに小林は非常に喜んで  
兼定はよく切れる、一刀に遣つ付けたと話した、左様して見れば吾腕が  
足らぬのであると初めて悟つた。筑波の時に下妻で幕軍が差して居た  
刀を分捕したことがある、銘は國廣とあるので、同僚がコレは名刀だ堀  
川の國廣なら新刀の正宗だと皆羨ましがつた、其れから、稻吉村と云ふ  
處がある、水戸街道でこゝに女郎屋があつて、友人と一夜酒を飲んで居る  
と岩城の藩士が二人此家に泊て居た、小林がどうした事か口論をして  
酒興に乗じて一人を斬つた、其の時藩士の爲めに二の腕を切られて危  
くなつたから、吾は後ろより其敵を袈裟に切た處が、一刀で斃れた、初て  
愉快に切れると思つた、之が國廣で、今一人の藩士は驚て逃て仕舞た、ス  
ルト槍持の男が刀を抜て小林の肩を切た、これで小林は倒れる、吾は直  
ぐ飛込で中段を拂つたと思ふと槍持の右の腕を切落したからそこへ

倒れる二の太刀で咽喉を刺して仕留た、實に國廣は切れる、併しこれは  
吾が腕前も多少熟練したに相違ない、最初は近く摺寄て切付た積りで  
も漸く切先が當る位で十分に切る事が出来ぬ、梅村が接戦をするには  
敵の股ぐらへ、吾右の足を踏入るゝ位にして初て、切先がよく、向ふへ届  
くと言たが實に其通である、あの時分吾仲間では誰の作が能く切れ  
るだらうと云ふ評議をした事がある、關の孫六(兼元)は一人として切れ  
ぬと言つた人は無かつた、其れから康繼、河内守國助、出羽大掾國路が評  
判がよい、島田の義助何代目か知れぬが畑と云ふ人が差して居たが、三  
ッ胴を試して立派に切れたと言て居た、人と戦ふ時古刀の名高い物は  
いけぬ、新刀でも是は切れると自ら深く信じた刀でなく、では氣後れが  
してだめだ、手が利くなら二尺一二寸の刀がよい、二尺でも十分である、  
片手で自由に切廻す程工合がよい。

## ▲岡田切吉房

此刀は幕府の旗下、和田飛驒守の家に傳來した刀

で、今は何處にあるか分らぬが、一文字吉房の作、長さ二尺二寸七分丁子  
及、此刀の由來は織田内府信雄、吾家老岡田助三郎(長門守)と常山紀談に  
はある。秀吉へ内應の嫌疑があつて、誅戮を加えやうと土方勘兵衛を對  
手と定め、岡田を招き鐵砲を出して見せ、岡田少しさし俯く處を土方引  
組たれば、岡田脇差を七八寸脱きたる時、信雄佩刀を抜て土方離せと  
と呼ぶ。土方手早く短刀にて岡田を一刀刺して突放した處を、信雄透さ  
ず切殺したと云ふ。この時の信雄の刀は一文字吉房なれば、岡田切と名  
けたと云ふ。別説には、信雄大左文字の刀にて岡田を斬るとも云ふ。

▲刀の折紙 刀の折紙は慶長の頃から行はれたので、極く古くと  
いつても慶長五六年の頃であらう。併し慶長の折紙は甚だ稀である。元  
祿折紙と云ふと價格がよい。慶安承應から元祿までは、武道の吟味の強  
いだけに鑑定も正しけれど、田沼の執政時、代寶曆前後となると折紙ま  
たが信用がない。また寛政となるとよい。享保は勿論よいので、此の折紙

に本阿彌の宗家から出るのは、眞の折紙で裏面に本の字の印がある。此  
印は太閤拜領の印といふ説がある。また他の本阿彌のもいくらかもある。  
其等の鑑定書は添狀と稱し、確と極めた鑑定ではない。例へば本家から  
出る折紙は、正宗と書くが、添狀には、何々の御刀拜見致候處、正宗と見受  
申候云々と書く。又同列共へも相談致し候云々など書く。また御傳來物  
と云ふ添狀がある。是れは大名或は旗下から其家傳來の刀に添狀を附  
けるに、此刀は正宗ではないと思つても、其家に累代正宗として持傳へ  
た道具であつて見ると、非難を附ける譯に行かぬ。若し其持主が短慮な  
人でもあつたら、飛んだ騒ぎが起る。乃で御傳來の御刀拜見致候處、何々  
と拜見仕候と書いて、御傳來の三字で鑑定の責任を免るゝのだ。折紙の  
代金と云ふものも、元祿頃迄は極々安い。元祿十五年版の「古今銘盡」の附  
録にある代金附を見ると、福岡一文字則宗、福岡住の助眞のが共に二十  
五枚、大一字助宗のが十五枚、備前光忠のが三枚、長光のが二十五枚、景光

十枚、兼光のが十枚、元重のが十五枚、景光のが七枚、三條宗近のが十五枚、安綱のが十枚、來國光のが二十五枚、粟田口久國のが十五枚、信國のが五枚と云ふ格だ。吉光、正宗、郷の三作は代附がない。貞宗のは五十枚、ざつとこんな物で、其より追々代附が高くなつて、百枚、二百枚から千枚もある。又何貫と云ふ代付もある。代金五枚は百貫に相當する三百貫と云ふは十五枚である。昔は代附の數の内に忌むものがある。六枚、十三枚、十七枚、五枚、四十枚、四十五枚、六十枚、百三十枚を嫌つた。何故に嫌つたかは少しも分らぬ。又鈴木蘭臺先生の説に、本阿彌家で昔折紙を書くに、御三家より頼まれて御祝儀の献上物や、御進物に附る折紙には一定の極りがあつて、尾州様は何枚に書く、水戸様は何枚と刀の善悪には頓着のないものであつたと言はれた。太平の時代には斯様の事がいくらもある。若し古い折紙の附いた刀を求めて此の刀は誰が所持した物であらうと、昔の持主を調べて見たいのは好事家の情である。左様の時には本阿彌の

本家へ頼んで元帳を調べて貰へば直ぐ分る。本家には慶長以來の元帳がチヤンと全備して居る。此れだけは同家の一大美事で、刀劍社會の爲には實に喜ばしい事である。先年吾等一刀を求めた處が元祿の鞘書があつて折紙はない。刀を本阿彌へやつて古い帳面を調べて貰つた處が松平甲斐守殿よりと記してあつた。則ち伊豆守信綱の子で甲斐守輝綱と云ふ武道の穿鑿のよい人の差料と分つた事がある。折紙はあつても本物の刀は他に轉じて、別の刀に折紙が取合せたものがある。寸尺も同じく國も同じで而して刀のつまらぬものがある。是が中々多いから油断は出来ぬ。

## 第十四門 朶雲片々

▲將軍の差料 竹本要齋氏は徳川十二代愼徳公十三代温恭公十四代昭徳公の三世に奉公して、御小納戸、御小性、御側御用取次を勤た人であるが、同氏の話に將軍家が常に御差料になるは正宗が重で、又備前守家の御刀の時もある、紅葉山御參詣の時はいつも豊後の行平の御太刀が出る、愼徳公は二三度郷義弘を常に召た事もある、一體將軍家は刀を帯る事はない、御座の時は刀掛へ大小共に懸ける、御座の間御用で出御の時は肩衣を召すから、脇差のみお差になる、お屋敷の中やお庭でも御小姓が左右の手に大小の御刀を持つてお供をするのだ、御鷹野の時は股引半纏を召して脇差ばかりお差になる、お刀はお側が持つ、斯う云ふ譯だから吾々は大小をお差しになつたのをツイぞ拜見しなかつたと話された、世間に將軍お差料の清光だの康光のと云ふものがある、之

は親き大名や執政などに賜つた刀で、御差料のお刀を下さると云ふ名義は付くが、實際差料ではない、御納戸にある品を賜るのだ、又代々傳はつた名物の刀は御差料にはならぬ、此分は掛の役人が別にあつて保存されてある、維新瓦解の時所藏の名刀悉く官軍に分捕せられたと勝海舟翁が話したから、ソレでは名物の刀も今は有りませんかと聞たら、其處で己が西郷に掛合つて二百本許り取戻したのヨ、ソレが徳川家にあると言はれた、竹中氏の話では刀劍は總て本所の竹倉へ隠し、其のち淺草の米藏へ移し、辛苦して保存したのが、今徳川家にあると言はれた、どちらが本とうか分らぬが、官軍より取戻した後に竹中氏の手で隠したものがとも思ふ。

▲三條相國の献刀 東久世伯太刀奉納の事は別項にあるが、嘗て三條故相國も太宰府神社へ記念の太刀を奉納せられたことがある、其時公は左の歌を添て奉られた、太宰府神社へ太刀をさゝげ奉りてと前

書してつるぎ太刀ぬさと手向て立かへる心の内は神や照さむ心の内  
はとあるは心の内をの誤寫で有ふ、又三條公が甲府の古府中武田信玄  
の古城跡にある武田神社へ奉納せられた太刀がある、金装紋散して立  
派なものである、一文字の刀と云ふ事であるから、わざ／＼参拜して拜  
見したが、福岡一文字ではない、應永頃の備前刀で則光か勝光位のもの  
らしい、併し吾等には確と分らぬ或は片山一文字の末作かも知れぬ。

▲小狐丸 小狐丸は小鍛冶宗近の作で、最も有名の刀である、謡曲  
の小鍛冶に神體時の弟子なれば小狐と裏にあさやかに地へうち奉る  
劍の、刀は雲を亂したれば天叢雲とも是なれや、天下第一の、天下第一の  
とある、此の程人に知られた小狐丸も今は那邊にあるか、此の太刀は一  
條天皇御願成就の事あつて、奉納の爲に宗近に勅命の上稻荷山にて鍛  
練せしものなりと言傳へてあるが、参考保元物語には少納言信西淨衣  
は家に傳へたる小狐と云ふ太刀を帯び、源義朝を召す杯とある、其後信

西は落命し、小狐丸は九條家の什器となつた、いかなる仔細か分らぬが  
建仁寺大統庵に納りて其後に紛失して行衛が分らぬ、享保の頃越前の  
國に小狐丸があると云ふ風説があつて、八代將軍の命にて久世大和守  
より、越前の松平家へ尋ねたから、國中隈なく搜索した處が、それは足羽  
郡阿波賀村に春日神社と云ふがあつて、此社に往古より傳來の由にて  
小鍛冶宗近の刀がある、太刀銘にて拵えはなく棒鞘である、此神主は吉  
田日向守と云ふ者だが、其家にも何の頃よりか當社にあるとも知らぬ  
由、刀の長二尺二寸七分餘、二字銘にて宗近、但鞘の上に小狐丸影と記し  
てある、其後幕府の命にて刀を江戸へ差出した處、將軍一覽の上春日社  
へ返されたと云ふ事だ、シテ見れば此刀は小狐丸の寫しと見ゆる、影と  
云ふは模造刀と云ふ事で、作人、宗近ではあるまい、然るに七八年前京  
都より小狐丸の眞物が出たと云ふ振込みで、二三人其太刀を持って上京  
した、一人で見ると面白くないと心付て、西垣氏を招いて其刀を見た處



が全く拵物で、鞘は黒塗金字で小狐丸とあつたが、直刃の京物時代も四五百年位のものらしい。宗近など真正の物が滅多にあるべき筈はない。

▲白川樂翁の抱鍛冶 松平越中守定信が老中首席の時分、寛政度内裡御造營の御用にて上京して大阪へ廻つて滞在した時、大阪中の刀鍛冶を取調べて一刀づゝ召寄せ、内々で試して見た處が、どの刀も刃がコボれる。其内で播磨の鍛冶で氏重と云ふ者が鍛へた刀のみは少しも刃がコボれず、其上切味がよいので、定信は是は良工であると早速召抱へて、江戸の屋敷へ住居させ、鍛練させた播磨手柄山の麓に居たから初めは播磨住人氏重於手柄山麓柞之と切た、其後大阪へ移住した手柄山氏重と銘を打ち更に江戸へ來てからは、奥州白川臣手柄山正繁となつた、江戸へ來たのが天明の頃と云ふ説もある、後受領して手柄山甲斐守正繁と切つた、大龜文の刃が得意である。此時大阪の鍛冶の刀は皆刃がコボれたのを定信嫌つたと云ふことに就て、其頃江戸の刀劍家の評

判に越中守殿も刀の事は委しからぬと見える、其の譯は刃のコボルと云ふは古身新身の區別があるもので、新身にては刃のコボれる程焼かねば年數を経て役に立たず、新身の時に刃のシマリよければ年久くなつては、生くら刀となる物であると云ふ世評で、奈何にも一理ある論だと賛成したのもあつた。

▲樂翁公の愛刀 松平越中守天國の太刀を秘藏の事前に記したが、此頃江間政發氏に樂翁公秘藏の太刀の事を聞たるに、公が一代の秘藏刀と言へば、天國作である由、長二尺四寸程と記憶す、菅蒲造りにて在銘であるが、此刀のみは至極の愛刀で、常には茶柄の角の巻掛け、黒塗鞘の拵にして置き、太刀に用ゆる時は同く白茶色の柄、鞘全部をも巻た、所謂鞘卷の拵へ、正平革の帯取り、鐵の金具で、古代の太刀拵にしてソレへ天國を入れて帶る用意になつて居た様子、外に名刀も有たらうが、愛刀と云ふ程の物は遂に聞いた事がない、珠造りの短刀と云ふものがある

全部玉を以て飾つたもので、至極見事なものであるが、身は新刀を用ひたと語られた、此白茶柄の刀は、樂翁公より初りて、當時流行したものと見える。水戸紀年に文公仰らるゝは近ごろ越中守白茶柄の刀をさすが越中守があつた様な物數寄をしたなら、世上でまた眞似を致すであらう云々とある、果して寛政には白茶の柄が流行になつた。

▲松平信輝 徳川三代四代の時代に政治家を以て名譽のある、松平伊豆守信綱の子、甲斐守信輝はさして世上に名の聞えぬ人であるが此人武道にかけては父伊豆守よりは立優た人と見え、天草一揆の時も單身抜掛をして功名を現し、却て父の勘氣を受た位の人だ、新井白石も甲斐守殿は武道の穿議、武器の研究、業にすぐれたる御方なりと賞讃した。四代將軍日光社參の時は既に天下久く大平になり、戰場に往來した武功の人々悉く此世を去た時だから、行軍の事も陣營の事も只軍學者と稱する畑水練の先生に聞て行ふ丈である、御三家初譜代の大名十萬

人も日光邊へ押詰めて、其混雜と云ふもの一方ならず、旅宿が定まらず立明す人もあり、野陣の掛やうも知らずに狼狽するもある、中で甲斐守は兼て陣小屋を切組置き、馬に附けて自分より先へ廻して置たから、着くと其儘岡の上へ床机をたて、自ら鞭を以て指揮をなし、僅に半時許りに陣小屋を取立て、幕を打ち、簾を焼き、夜廻り、張番等少しも故目なく、整々肅々と陣を張つた、之を見て外の大名皆驚いたと云ふ、斯様の人であるから、馬の鞍、槍、長刀の拵方まで實地に就て研究をなし、其時分には甲斐殿好みと云ふ一種の武器が流行した、刀の如きも甲斐殿好みは巾のある物で、長は二尺三寸止り、拵も至て丈夫に、質素を旨としたものである、先年吾等が所持した備前兼長の刀は、巾の廣い大出來の刀で、誰が見ても師匠の長義に見ゆる、其鞘書に元祿十年云々とあつたから、本阿彌家へ頼み、原帳を調べて貰つた處が、松平甲斐守殿備前兼長、無銘二尺三寸二分代金三十枚とあつた、また西垣氏が見て話すには松平甲斐守所

持の保昌五郎貞宗がある、これは黒田甲斐守の事で有ると持主は然思つて居ると云ふから、黒田は左衛門佐の代に松平を稱したから、無論信輝の事に相違ない、其刀も大きい物かと聞たら非常の大出来巾廣で、鐵の金具、青革で柄を巻き至て武骨のものであると言れた、さうして見れば力量もあり武藝にも長じた人と見ゆる。

▲甲州鍛冶 甲斐の國には世に聞えたる刀匠がない、舊幕時代に甲州鍛冶と云ふ者は一向に聞えぬ、先年甲府に遊びし時、古老に尋ねるに昔より言ひ傳へには、信玄公備前より許多の鍛冶を呼下し、甲府の東、鎮目村にて刀劍を鍛練させたが、其地に山より流出る備前川と呼ぶのは、此邊りに備前鍛冶が住たる故であると話された、其後段々調べて見ると甲州へ下つた鍛冶は備前長船の祐定、關の兼舎、島田の義綱、廣舎、相州の元成等である、祐定は天正祐定であらうと思ふ、また兼舎は業物の譽のあつた人で、元關に住し、のち甲州へ移つた、天正ころが盛んに鍛た

時代である、義綱は島田の一派で遠州に住し、後甲州に移つた、廣舎は元文の頃より身延山の下に住して居た、元成は素より甲州の住人で、相州の傳を受て居る、是は天文の頃の人と云ふ事である、武田信玄は終身近國の敵と戦つた人で、常に二萬三萬の兵を運動したから、兵器の製造にも多くの工匠を要したに相違ない、然るに歴史傳記に甲州鍛冶の話が少もないから、多年疑て居た處が、近ごろ此五人を發見した、此の人々の弟子も必ず有らう、さすれば甲州にも武田時代には刀匠があつたものと定てもよい、残念な事には此人々の刀劍を未だ一刀も見つた事がない、信州の人で義綱の作を所持して居る者がある、大業物と云ふ噂を聞いたが、それも未だ見ぬから何のお話も出来ない、此頃小倉氏に右の話をした處が、元成の刀を石川某が所持してゐるを見たが、普通の鍛冶で別段上手とも思はれない、また天正祐定は多勢の弟子や從僕を引つれて東海道を往來したと云ふ話を聞いた事があると云はれた、是も参考の一

つである。

▲刀劍の代附 舊幕時代には、刀劍の代附を代金何十枚何百枚と記し、また何百貫何千貫とも極めたものであるが、此何枚何貫は織田、豊臣時代より初つたものらしい。足利時代には何千疋と記したものがあつた。吾等先年肥後熊本にて誰人の書たるものにや、或刀商が所持した古寫本を借用して旅宿で一見した處、斯う云ふ事が書てあつた。聞しは昔應永の初めには正宗、長義、長光など申すも皆新刀にてさしたる價もなし、其頃御所焼の太刀、菊作代附は二千疋、安綱、伯耆、友成三千疋など申したる事なり云々とあつた。足利時代には何疋〜で刀劍の位を定めたものと云ふ事實を初めて知つたのである。其後、秋霜雜纂に文明の代付を掲げてあるのを見て、愈々當時の代付は枚數でない事を確めた。今讀者の參考に文明年間の代付を御披露致さう。此の文明は足利義政薨後、義尚の代で、應仁大亂の後で、諸國に戰鬪の繼續せられつゝある所謂亂

世である。刀劍の需用最も多き時分と見ねばならぬ。其文明の代付を見るに三千疋八工、大和、安則、來國、次行、光、助真、高包、吉平、長光、左、二千疋有國、則國、則重、助包、吉房、則房、光忠、丹波、正國、千五百疋が新藤、吾國、光、宗、吉、千疋が包永、來國、包、國、長、國、安、兼、吉、國、宗、秋、廣、月、山、國、房、五百疋が重弘とある。

▲幕末の相場 水野瀧雲、舊幕末三傑の一人と稱せられし人にて外國奉行水野筑後守隱居後の名なりの話に、文政の頃は正宗の刀凡五六十兩以上にて、盛光の類二十金以上であつた。新刀の國廣、虎徹、繁慶、五字、忠吉の類は十五兩より二十兩まで、其以下に至ては五六兩上作にて、も十兩に至らず。二代目忠廣などは六七兩を限とせしが、今は(文久頃)正宗、貞宗の類百金以上二百金に至り、虎徹、繁慶、忠吉の類は五十金前後となり、出來宜敷品は七八十金にも至り、忠廣も三四十兩に至つた。殊更彦根侯、櫻田の事ありし頃よりは一際引上り、其後追々講武所も盛んになり、又外國御用出役として外國公使の旅館へ詰め、外人遊歩の節附添ふべ

き爲め御目見以上以下の人々に命せられてより、實用専らの新刀盛に行はるゝ様になり、文政の頃康繼などは三兩前後、脇差は一兩前後の品數夥數なりしに、是も刀は二十兩以上に至り、總て三四兩より五六兩の品三倍になり、又た文政の頃は刀二尺三寸以上五寸となれば上作にて買入少なかりしも、今は上作にても二尺四五寸ならでは人々好まずされば忠吉、虎徹なども二尺五寸以上の偽物、拵へ銘の刀多なりぬ云々とある、内藤耻叟翁の話に吾等が壯年の頃は正宗、貞宗など云ふ刀は大名でもなくば差れぬものと思つて居た、俗に十哲など云ふ名作は容易に見る事も出来ぬ、家老、番頭など云ふ歴々千石二千石の大身でも五字忠吉、初代康繼、津田、眞改など云ふは秘藏したもので、之を求むるには二十兩三十兩も出さねば今日の金では二百兩三百兩にも相當する吾々の所では精々五兩七兩の刀を差料とした、ソレでも今日の金にすれば六七十兩で立派な金時計位に當ると話された事がある。

### ▲日本の刀の數

日本國名産の刀劍は其數幾ら程あるか實に夥しいものであらう、古今鍛冶人名早見と題する書に名前を出て居る鍛工の數のみでも一萬三千餘人ある、此鍛冶一代に百本平均鍛錬したものとすれば、概算百三十萬本である、此外名の知れぬ鍛冶がいくら程あつたか夥しい數であらう、また徳川時代の武士の數に據ると刀の數も大概推算が出来る、慶長元和の軍制に據ると出兵の數は百石に付き五人、千石の旗下は上下五十人、一萬石は五百人と云ふ定めで出陣の地の遠近に由つて其差がある、朝鮮征伐の時九州は百石六人、中國は五人、畿内は三人、北陸、奥州二人と云ふ様に割當てた、大阪陣も其通りで平均五人が定めだから、三萬石の石高(天保ころの調)で全國の兵百五十萬人である、百五十萬人の兵一人に付き一本づゝ刀を所持すると百五十萬本、差替の一本二本ない者はないから、一人三本として四百五十萬本ある割合である、大名の家には百本も二百本も所持したものの百姓も町人

も元祿以前は大小を差したものだから、此等の者の所持品もあらうと思ふ、然うすれば大略六七百萬本の刀は日本にある筈だ、尤も其中に焼失したのもあり、水中に陥つて了つたのもあらうが、其れにしても其の半數位は今日に残つて居る筈だと思ふ。

### ▲名刀の偽造

ある人の話に、石田三成は堀川の國廣を近江の佐和山へ呼んで刀を鍛せ、正宗の銘を打て大名へ進物にしたと云ふ話である、モン三成が正宗の偽物を造たなら、大名の家に在銘の正宗がありさうな物なれど、在銘は一向にないから、此話も信じられぬ、三好下野守の聞書には足利將軍義輝、殊の外粟田口國綱の刀を好み、國綱を献上する者あれば大に喜ぶ、常に身を離さず帶て居る刀も皆國綱だから、大名より刀を献ずる時は無銘の刀へ國綱の銘を切て奉つたと云ふ話がある、此時分に國綱の偽物がいくらか出来た、古刀鑑定書に村正の刀は御當家に不吉であるから、銘のあるは大かた切取て直江志津の鑑定書を

附るとある、また伯耆守正良の刀と主水正清の刀は、無銘にして志津兼氏にすると云ふ話もある、先年一人の女髮結が話に妾の父は清磨の弟子で、刀を打ましたが至て下手で、其時分新たに打た刀は二兩位なれど、道具屋に頼れて偽銘を切れば、一刀の銘で金一分になる、一日に二本も切れば家計には澤山であるから、常に偽銘を切りました、いつも刀屋が五本も八本も持て来て、この刀は左の字を入れる、これは虎徹、これは兼光と紙札を付て置いてゆきます、虎徹が一番多い様でしたと話した、この女の親は麻布に住て明治廿年をろ歿したが、慶應の頃から偽銘ばかりして、一家の生活を立たとは驚くべき話である、吾等も十年許り前に此爺の切た虎徹を見た事がある、マガネもよく立て一見眞物の如く、餘程鑑定眼がないと欺される位であつた、實は吾等も虎徹では一杯喰た事がある。

### ▲南蠻鐵の刀

南蠻鐵を以て鍛ふと云ふ刀がいくらかもある、越前

の唐鐵などは多く南蠻鐵であるが、南蠻鐵とはいかなる譯かと質問する人が多いから、ナヨイとお話をする。刀匠の方で瓢箪及鐵と稱するのは、即ち南蠻鐵のことで、其の形瓢箪に似て居るからである。當時は和蘭あたりより舶來したもので、慶長、正保、元祿の頃まで多く舶載して、長崎奉行の手を経て江戸へも大阪へも來た。然るに享保の頃は追々少くなつたが、然し其時代には刀匠皆な賄へて居た處、寶永の頃より舶來せぬ様になつて、至て乏しくなつたから、白川樂翁執政時代に達しを出して南蠻鐵を以て刀を鍛ふこと自今禁止すべし、自然此鐵御用に相成る場合も可有之、みだりに遣ふ可らずと云ふ事で、其後は南蠻鐵で鍛ふ事は絶たると云ふ話である。

▲偽物の刀 堀川の國廣が正宗と化け、虎徹が正宗と變ず、これは澤山ある話で、また主水正清の刀を志津に直し、本阿彌享保ころ百枚の折紙を付た話が「秋霜雜纂」に出て居る。其ころ伯耆守正良が打た刀も志

津と極り、十八枚の代付になつたと云ふ。昔は古刀の忠へ新刀を繼ぐ事が行はれた。繼ぎ合せた物では折れる憂ひがあるかの様に思ふが、決してさうでない。是は鋸繼と云ふ事にする。昔江戸神田佐柄木町の刀屋が木曾街道を通行して、木挽職が大銘の刀を繼ぐのを見て、刀の忠もあの如くすれば堅固に繼ると悟り、江戸へ歸て古刀の銘のある忠へ似合した新刀を繼ぎ合せ、本阿彌に見せた處どうも繼だものらしいと言れて、左様ならば金鎚にて打て御覽なされと其座で打つて見たが、折さうにもせず、繼目も見えぬ。ソコで古刀の折紙を付たと云ふ話がある。先年西垣氏の家で廣正の忠へ新刀を繼だものを見た。

▲偽物賣付策 これも大阪で聞いた話であるが、紳士と稱する金満家に注意のためお話を致すのである。一商人云く、古刀の名作物を賣付やうとするには、先づ其の紳士の家へ親しく出入して、鑑定などを頼るゝ刀商と打合せをして置く。斯様斯様の刀がある、之れを何某に頼ん

で持込むから然るべき様にと内密打合をなし置き、ソコで親しく出入する何某(刀商ではない)より紳士へ話をす、此頃私の懇意の刀屋の手へ尾州(或は加賀、廣島など大藩がよい)の舊家老の家に傳つた正宗の刀を極内々で賣つて呉れと云ふ依頼であるが、成るべくは東京で賣つたことの望み併し私が聞いた上は、一應御前にお目に掛けた上で東京へ出すが宜らうと存じ、其趣きを申聞て置ましたと何となく話をす、スルト素より好物、名作を望む事渴者が水を求むるより甚だしいのであるから、其れは早速に見たいと何某へ命じ催促をす、處が急には持ちこまぬ、持主殊の外大切に、して、汽車にて運送などは出来ぬ、自身若くは親戚の者が近日態々持參するとの事と勿體を付けて、さて十日も経てから何某と道具屋で持ち込む、見ても譯らぬから、鑑定出来る出入の商人を呼ぶ、此者一見して大に驚ろき、此刀は尾州の何某殿にあつた正宗であるが、どうして賣物に出ましたらう、先年東京の何某様が頻に

御所望で、態々名古屋まで御出で有つたが、遂に賣らなかつた刀、さてさて珍らしい道具が世に出たと、只管賞美する、そこで紳士殿は一も二もなく代價を相談して引取る、と云ふのが普通の賣込手段、また一層巧みになると、某神社の神官の俸放蕩してお社に納まつた一文字を質に入れ、それが最早流れる、兎も角も質物より取出してお預け申して置たい金子が出来れば受戻したいから其お合でと、頭から國寶でもある様に吹聴して高金を出させる、これだから紳士社會の名刀と云ものは、頗る曰くが付く、或人(東京の刀商)が有名な大阪の愛刀家の家へ入て座敷へ通た處が、刀箆筒が十幾掉とやら陳列してある、其の引き出しへ張付た札を見ると小鍛冶、安綱、兼光、友成、高平、正恒、正宗、貞宗、大志津、秋廣など、古今銘盡から引出した様な札が貼付てあつた、これは耐らぬと見ぬ中から閉口したと當人が話した事がある、是は大阪に限つた事でもない、東京の紳士にも左様の愛刀家が澤山ある、日本橋邊のある銀行が金を



貸て餘儀なく撥保に取た刀が三十幾本あるが、其目録を見るといかに  
も上作名刀許り、實物を見ると恰で偽銘ばかりでは無かつたが無銘物  
が多い、正銘の物もあるけれども、正銘の物は鈍子がないとか、匂い切れ  
があるとか、何か申分がある物、無銘物は多く數打でも有りさうな中作  
ものへ大銘の札を付たのであつた、世間滔々皆斯の如しである。

▲彦左衛門の評 某氏の隨筆に、或時大久保彦左衛門忠致の許へ  
坂部三十郎來つて雜談をした、坂部が座敷にて人を斬るには二尺以下  
の刀がよい、其上にては座敷の働は自由にならぬものだと言へば、彦左  
衛門が昔堀監物が家人朋友に意趣を含んで、是非打果さうと決心した  
時、一尺五寸の脇差を入九寸に摺上げ、首尾よく敵を打留たる由、監物が  
話した、是は突抜て仕留る心掛である、美事に切放さうとすれば多くは  
仕損する、突く心得あらば仕損じはない、足下が二尺以下と云ふのも放  
討の心得であらう、放打と云ふ事は至極六ッかしいものだ、池田勝入の

話に大事の敵を仕留るには紐留て置で、突刺せば十中の八九通りはな  
いと言れた、あの朝比奈彌太郎(此人後ち水戸の老臣)が常に三尺の大刀  
を差て歩くが、外見に帶るならよいが、あれでは働きは出来まい、人を切  
らぬ刀なら精進刀と云ふものだと笑て話した、坂部この事を朝比奈に  
話すと大に怒り、直に大久保の家に至り、足下は吾刀を精進刀と言れし  
由、精進か生物か、一つ試して御覽あるべしと大刀の鯉口寛げて返事次  
第抜打にすべき見幕である、彦左衛門なる程、足下のお刀は至極の  
切物と云ふ評判を聞いた故、ソコで精進刀と申た譯だ、ソレは如何なる  
譯で御座ると詰寄れば、されば精進と云ふものは佛の名日にするもの  
であるが、是は直ぐおちる、精進おちると云つて魚を喰ふ、それで世俗でお  
ちると云ふが足下の刀に逢てはすぐ落る、首も胴も落るから精進刀と  
云つたわけと辯解すれば、朝比奈それで罷く相分つたと機嫌を直した  
から、大久保足下が長篠合戦の時、甲州の中備の大將内藤修理亮を打取

てお手柄をなされたが、あの刀は只今のお差料なるやと聞けば、いかにも此刀は一刻も身を放さず少し寸が延びたれど度々手柄を現はした道具故、摺上もせず斯様に常に帯て居ると抜いて見せたのは、備前國長二の刀二尺八寸二分、大久保が云ふ足下は内藤修理殿の命日には精進をせらるゝ由、左様の事も御座るかと思ふ、朝比奈いかにも修理殿の命日には精進を致し念佛を唱ふるのである、それでは矢張り精進刀ではないか、精進する程の大將を切た刀なればこそ、足下の武名天下に聞えたのである、精進刀と言われて何故に立腹せらるゝぞと口に任せて説立てられ、彌太郎大いに喜んで歸つたと、春村筆話にある。

▲國安の刀 新刀名鑑に國安は一條堀川の國廣が弟なりと云ふ、一代鍛冶にて至極の上手業物なりとあるから切れるに相違ない、併し上手の人にては出来、不出来は免れぬ事である、正宗の刀の折れた話もある一様には言れぬ事と思ふ、先年水戸の酒泉氏に逢た時、某の家に國安

の刀がある、珍しき物であると云ふからその刀は吾等も知て居る、嘗知た許りではない、武田伊賀守と共に中湊へ籠つた時、今の某が親も吾々と共に大發連の仲間、湊に居たのだが、或時某が部田野の戰場より歸て来て、此刀は随分高金を出した品であるが、一向に切れない、逃るやつを背より切付たが、ホクツと音がした、少しは切れたかも知れぬが、とうとう逃げて仕舞た、餘り變であるから死骸を一つ試したが、腕を切た許りで、胴は半分も切れぬと言ふから、ソレは腕が利ぬからだ、と笑つて仕舞た、二三日経て富田三穂介が其刀を借りて差し、峰の山へ手勢を引て進撃して、其日は勝軍をしたが、國安の刀を投出し、メメだ、首も落ち、い刀はメメだと言つた、富田は度々戦つて多く人を切て居るから腕は研て居る筈、ソレで切れぬとは妙な譯と、其次は吾等が借て出掛た、此日は藏田小四郎の隊と富田の隊が先陣で、吾等の組は接戦をせぬから、味方の取て来た首級を二つ三つならべて試したが、さて何としても切な

い、遂に有名な切れぬ刀と云ふ事になつた。其からコレは銘々の刀も一度や二度は試して見ねばなるまい。刀はいつでも切れる積りで居てはいかぬと云ふ事になり、軍のない時は至て閑散であるから、佩刀の吟味が初つた。誰の差料であつたか水田の國重の刀が折れた事がある。元祖大興吾ではない大余吾は、至極上作と云ふから滅多に折れもしまい。能くは記憶せぬが大月茂左衛門國重かと思ふ。小林伊勢守國輝、出羽大掾國路などは大阪の鍛冶なれど、至てよく切れたと其頃話して居た。吾等は永正頃の關兼次で何代目か分らぬが、立派に胴が落た事がある。誰も名を知らぬ來國治の刀があつた。富田がさして居たが名を聞ば來國次の弟子でもある様だが、尾州の新刀で誰の弟子か分らぬ。此刀は至て切れる。其後段々聞て見ると朝倉が言ふには石堂是一の刃文に似て居る。至極上手な鍛冶と云ふ事であつた。田丸稻右衛門が井上真政を持て居て他に貸て切らせたが、是も國安同様一向に切れない。さうかと思へば辨

原新左衛門の井上真政は至てよく切れたから妙だ。何としても刀は試した上でなければメメだ。正宗でも吉光でも名物になつた物は昔な切味のすゞれた故で、作柄で名物になつたのではないと言はれた事がある。至極光の話と思ふ。

▲大村加卜物語 大村加卜は元祿の頃の人。刀の鍛錬に妙を得て天下に其名を轟かしたが、餘り豪氣な人物なる爲め、多く人を斬殺し、家にも居られず、諸國を經巡り水戸義公よりも扶持を賜り厚遇せられし事があつた。此人の直話として世に傳へられたる話の中に、興味のあるものを紹介しやう。加卜が言ふに大和の保昌五郎は古への上々作の打様に似たれば此刀は折るゝ事なし、されど指料には惡し、夏五月の頃、自分はこの保昌五郎にて人を殺した處、人の油染付て落す、殊の外臭みありて困りたり、されどこの作は折れず、大和物は多く折れ易し、予が友人なる駒井山三郎も大和物にて戦ひ、刀折れて相手に腕を切落され、武家

の奉公ならずして醫者になつた。またある年淺草橋で五人の侍と一人の町奴と切合ふ。町奴橋の欄干の下に隠れたるを五人等しく切付たるに其中三人の刀折れたり。是皆大和物で、自分は親しく目撃したり。昔より大和物の折るゝと云ふは地鐵丸及鐵の故である。予ある時粟田口久國を三腰模造したが、一腰は疑ひもなく久國に出來た。自分は之を差料に拵へたるに、明曆三丁酉武州大火の節、箱に入れ置て焼た故又古備前風に焼直す。之を正信少右衛門五兩に買取て、此少右衛門は古刀の樋の消たるをかき續ぐ事と振を直す事の上手な人なり。其刀を本阿彌光温に見せたるに、光温は、此刀は粟田口久國の思ひ寄りはあれど、見た處古備前と見ゆるによつて、代二十五枚金三百五十兩に賣るべしと鑑定したが、少右衛門はやがて予が許へたづね來り予が打た刀とも知らず堀出しの自慢を言ひ、折紙を見せたり。本阿彌は鍛冶の心少もなき故、斯様の自利をするのである。予若き時越中吳服郷則重の鍊ひ様を學びて打

た刀がある。其頃は新太郎と言たから、忠へ新太郎と切た。後に此刀吾方へ持來りて置くうち、刀脇差の細工する白銀屋勘兵衛の所望にて其者に得させたるに、此刀を安藤太郎左衛門と云ふ家老に金七兩にて賣る。此刀を本阿彌光温亦鑑定して則重に極め、十七枚の折紙を出した云々。

▲百草翁の話 實名は分らぬが、百草屋老人と云ふ鑑刀家の談を記せしものに見識のある論がある。新刀、古刀を慶長にて堺を立るは堺もない事だ。勅命にて極りたるでもなし、將軍の命にもあらず、慶長五年この方を新刀と定め、應永前を古刀とし、其間中身とす。誰が極めたるでもなく、銘々いつか言習したのであらう。水心子が慶長以來は鐵色迄も古刀とは同じからずと言たるは、一應は理りなれど、新古は必ずしも刀の造り様に據る譯にあらす。造り方の一變は正宗が出たる時に變じたのである。古刀とは神代より傳りたるを言ふ。後鳥羽帝以後を新刀と言ふが當然であらう。また古刀は貴く新刀は賤しと言ふことは、一切なき

筈である。古刀に悪きもあり、新刀に上作もあり、新古を以て上下を分つべきではない。

本阿彌家で、無銘の刀に誰作と中心に象眼銘、または朱銘を入れ、または無銘の儘にても折紙を出すは、一向何の據るもなき無益の所業である。刀作りたる人と常々交りて、其作の刀を目に見慣れてすら、出来口の違ひたるに至つては、目利が違ふ事がある。是して日本國內上古より今に至るまで、幾千萬と云ふ刀鍛冶の作を、誰がたしかに見定むべきや、本阿彌が家にて是は正宗が掟に似たり、依て正宗と極る、これは貞宗の押形に似かよふ、依て貞宗と定るといふやうな事で、ホンの當推了である。其證據には是迄志津の極めの付た刀などを、高位の人か富豪か、手に入れて、折紙を隠し、本阿彌の目利にやれば謝禮の多きにつれて、正宗にも貞宗にも極める、又直刃の刀などで何とも分らぬものを、目利にやれば、職業柄分らずとも言れず、宜い加減に推了して誰作など、折紙を付

ける、無銘は無銘にても其刀さへ良ければ、誰作と極めずとも能いのである。のれ、作者がなければ刀は役に立たぬ様に心得て居るのは笑ふべき事である。云々とあるが、此等は一見識の説である。また刀劍家が此刀は代價いくらが物であらう杯と、代價を先に聞たがる人が多いが、これも秤のない穿鑿で、刀は買手に依て相場の立つものであるから一定の價は決してなし。

▲静の長刀 徳川將軍家には代々お譲りの御道具と云ふ者があつて、代替りには引渡の式がある。ソレは彼の勝川の鑑、本庄正宗の刀、檜柴の茶入、爲朝の矢の根の投鞘など種々あるが、義經の妾静御前の持た長刀、眉尖刀も其一つである。此長刀は三條小鍛冶宗近作で、幕府では御打物と稱し、將軍が出る時には必ず駕籠の先へ持て供をするのであつたが、三代以後は寶物扱ひになつて行列へは別の打物が出る事となつた。武野燭談に静が長刀として一の同朋の預りにて御秘藏第一也、常にお

居間に置き給ふ、然るに家光公ある時、鷹野先にて此長刀にて雁をかけるゝとて、忠より打折られたり、名物と云ひ御譲り道具によしなき業したりと御後悔ありし時、堀田加賀守御用鍛冶山城守國清をして打續せたるに、少しも弱みならず、切るゝ事恰も瓜を割るが如しとある、また一書に、この長刀は青貝柄なり、大猷公御代より御供には出ず、御玄關獅子の間御床飾りとなり、御徒衆の預りなりとある。此長刀に就て一の話がある、前田家にも静女の長刀とて代々御秘藏の物がある、ソレも小鍛冶宗近作と云ふ事である、人が小松中納言利常卿に、御家に宗近作の静の長刀があると承つたが、公儀にも同一の御道具があるのを以て見れば、いづれが真物なるや、一方は必ず偽物ならんと云つたのを利常、愚かな事を言ふもの哉、静は義経の妾なり、義経は伊豫の國司なれば、長刀など幾振もあるべし、必らず一振と限りたる譯なし、それ故どちらも真物なりと言れた由、面白い見識ではないか。また其名は忘れたが、山崎成

美の書た本の内に、淺草觀音の本堂に静御前の長刀がある、本堂の裏手大黒天を安置してある承塵の上に、昔から掛て居るとあるが、今大黒天の上には左様な物も見えぬから、定て土藏へでも納めたで有う。これでは静の長刀が三本に成る、どうも斯う何本も出ては困る、幕府の長刀の事に就て、栗本鋤雲翁は、あれは志津の長刀で、志津三郎兼氏の作になる大業物であると話した事がある、志津と静と同音で誤り傳へたのであるかも知れぬから、一見して疑ひを晴したいものである。

▲丹後掾の祐定 「煙霞綺談」柴の畑り等に出て居る、丹後が遠州にて人を斬た話に似て居るが、これは名古屋の此君亭の筆記にある話だ、其刀を吾等も一見した事がある。遠州の某村にて義太夫語り丹後掾と云ふ者、十日間興行して大入りなれども、興行主十兵衛約束の金を渡さず、其の上悪口せしとて丹後掾甚だ憤り、連れて來た妾に暇を出して大阪へ歸らせ、態々濱松迄ゆきて祐定の刀を求めて立歸り、十兵衛を往

來へ呼出したるに甚八と云ふ乾兒も附來る、丹後掾、其方前夜の悪口覺えあるべしと言ながら、腰のつがひを横に拂ふ、十兵衛驚きて逃出し、三歩四歩あゆみて二ツになつて倒れたれば甚八驚いて後より組付んとするを、前膝ついて正面を切る、鼻より頤を切割り、胸前掛て一尺餘り切れて斃れた、丹後掾心しづかに刀を小川に浸して洗ひ清め、安樂寺と云ふ寺へ駈入り、懷中より三兩出して是にて埋葬の事よろしく頼み入ると申述べ、本尊に向て念佛を唱へ、十文字に腹を切りまた咽喉を掻て死んだ、義太夫語りの男としては天晴の最期なりと評判高くなり、それに就ても刀は大業物なるべしとて、寺に納りしを供養料納て申受た人あり、ソレをまた懇望して維新前に名古屋の士族某の手に歸し、更に服部と云ふ者所持したのを吾等も見た事がある、祐定の二字銘で二尺一寸位も有るか天正頃のものか慶長ごろと見ゆる、出來は餘まりよくも見えぬ刀である、祐定は多いだけに人の賞鑑を受けぬが、日清戦争の時も祐

定の手糊話が澤山ある、上手の名のある鍛冶でも切れぬのもある、祐定其名卑しとて決していやしむ可きでない。

▲猿正宗の由來 細川家に猿正宗と名づくる名刀がある、と云ふが、其由來を、秋霜雜纂に引てある、出所は、阿州奇事物語と云ふ事だが、吾等まだ見ぬ書であるから作者も分らぬ、さて肥後熊本の飛脚二人、御用書の入た函を持って肥後を打立ち、江戸へ赴く時、駿河の薩陞山へ掛つたのが朝の事で、旅人の通行もまだない時分、山より麓の磯の方を眺めながら行くと、折節海より章魚が出て一疋の大猿の手を纏ひ、海へ引入んとす、猿は岩角に取付て引込れじと争へど、已に危き體になつた様子、二人の飛脚面白き事に思ひ、礫などを投て見物し居たが愈々猿が危くなつたのを見て、コリヤおの猿を救てやらう、よからうと二人山を駈下り、御書函を傍へ差置き、腰の刀拔で章魚の手を切れば、さすがに弱つて其儘海中へ逃入た、彼の猿は救れて大に喜ぶ様子であつたが、突然後の御

書函を取るより早く、道もなき山の上へ逃登りたれば、兩人大に驚き、  
 「ヨ、ヨ」と呼びたれど、雖て猿の行術は知れなくなり、兩人甚だ困り切  
 り、大切なる御用の書類を納めたる文箱を取られ、今は、江戸表へ下る譯  
 にもゆかず如何にしたら宜らうと途方にくれて居ると、遙かの山際よ  
 り先刻の猿出て来り、片手に御書函をさし上げ、片手に何やら藁包の長  
 い物を持ち、此方へ走り来り、兩人の側へよりて先づ御書函を戻し、次に  
 彼の藁包の長い物を差置き、平伏して其儘山へ駆入りたれば、さては先  
 刻救れた禮に此藁包を持って来たものである、兎も角も御書函の手に戻  
 つたは何より喜ばしい事なり、何品にてもあれ猿の禮物申受やうと携  
 えて江戸に着し、御書函を差出し、彼包を開き見れば、棒箱に入たる刀で  
 ある、コレは不思議な事と其仔細を殿へ申立て、刀を差止たから段々吟  
 味して見ると、正宗の刀と分り、研上て見れば一點の疵もなき名刀、尺寸  
 も至て程合よく、細川殿殊の外喜び、二人の飛脚には厚く褒美の金子を

下されて、此刀を猿正宗と名け、爾來同家に家寶となつたと云ふが、不思  
 議な由來もあればあるものである

▲狼村正の短刀。土佐山内家の侍醫結城友伯と云ふ人、かねて治  
 療上手の聞えがあつて、ある時田舎の病家より招かれ、城下の荒倉山を  
 越る時、一疋の狼咽喉へ骨を立て苦んで居るのを憫み、口の申へ手を入  
 れて抜取つてやりたるに、其歸路同じ山中にて彼の狼一口の短刀を口  
 に噛えて待うけ、友伯の前へ差置て山中へ入りたれば、借は先日の禮物  
 と見えたり、何にてもあれ彼が志なれば貰ひ受べしと、其短刀を持歸り  
 よくよく見れば、村正作の名刀であつたと云ふ。其村正子孫に傳來して  
 立道が家に傳ふとある、此短刀長一尺九分、刀莖三寸五分、村正の二字銘  
 なりと云ふ。鳥がくわへて来た小鳥、これ以前に辯じた鶴が水中より  
 わへ上た鶴の丸の劍、三條吉家作、鷹の巢より出たる島津の宗近、随分奇  
 妙な刀がある、先年桑名に宿つた時、隣席の客が刀劍の話をして居るか



ら、其席へいつて聞た處が、伊賀の名張の人の言ふに、先年青山峠を越た時、獵師に聞た話であるが、ある時犬を引て山へいつた處が、草叢の中を見て犬が頻りに吠るから、近付て見ると四五尺もある蛇がとゞろを巻て居た、此邊は大きな蛇の多い處で、別に驚きもしない、打ちとめてやらうと二つ玉で首尾よく斃してきて見ると一本の短刀がある、柄糸も已に腐れたが、蛇の鞘は猶其まゝである、蛇が持て居たのでも存まゝだが、斯る山中にどうして有つたかと不思議に思て持歸り、其鐵道具箱へ抛りこんで置た、一二年経て馬を引て名張までゆき、其歸りに紀州の武家を空尻馬に乗せて遣すが、話をする中に、其短刀の話をした處が、ソレは是非見たいと云ふ、ソレで廻り遣して家へ立寄り、其武家に見せた處之は良い作の短刀である、十兩で賣つてくれと云ふ、五兩でも高い者だ、三兩位でよいと言たが、遂に五兩で渡し、作者の名を聞くと、二字國俊と書て置いていつた、二字國俊なら五十兩がものは有らう、惜い事であつた

と話を聞て、吾等も興に入り夜の更るを覺えぬ事があつた。

▲青島の當麻 新井玉英の筆記にあるが、延寶の頃の話で、宮城縣

下佐沼在南方村字青島と云ふ處がある、此の農家に娘一人ありて至で美人である、同村松島の某と云ふ青年、この娘に戀慕して何卒聲になりたいものど人を以て言入たるに、若い者は分別の定らぬものなれば一兩年も吾家に來りて農業を手傳ひ、辛抱致すならば其上にて随分聲にいたしてもよいと云ふ話、若者大に喜んで三年の間其家に奉公して晝夜丹精を盡し、農業を營み、只管親父と娘の氣に入らんとせしに、此親情なき男にて三年目に他より聲を迎へて娘に娶合せたから、若者大に憤り、ヨシ／＼此上は思ひ知らせて呉んと、懇意の侍より一尺六寸許りの脇差を借用し、夜深きころ先づ其家に火を放けた、スルト一家驚きあわて、戸外へ出る處を待受け、先づ娘の親を眞向より切つけて額より胸先まで割切る、續て飛出した母親をば胸を拂つて車に切放つ、娘が出て

来るをやがて右の腕を切て落し、此聲に驚き飛出した聲をば左の肩より右の脇まで、大袈裟にかけて切放つ、悉く一刀にて止留め、若者は其まゝ辻堂へ駆込み腹一文字に切て死で仕舞た、此の脇差少し曲りたれど曲り成に見事に切れたれば其跡にて段々吟味したるに大和の當麻が作と云ふ事であつた、當麻も幾人もあるが斯様に切味のよいのを見れば國行あたりの作ではないかと云ふ噂であつた。

▲庖丁正宗 庖丁正宗と云ふ刀は四口ある、庖子正宗と云ふもの元來庖丁の用に鍛ひたるものに相違なからう。此時代には四條流、大草流の庖丁と云ふのがあつて鯉、鯛、鶴、雁などを料理する一定の儀式があつた、其用に供する爲に出來たもので有らうと云ふ説があるが、吾等は信じない。さて今現存して居るのが内藤家の庖丁正宗で無銘長さ七寸一分半幅一寸三分、護摩箸を透し、庖丁に似たり、名古屋の古道具屋店にあつた物だと云ふ、次には荏柄天神の庖丁で、鎌倉荏柄天神社に傳つた

もの、是は巾の至て廣い、梅の花の透しがある、先年遊就館へ出品になつた事がある、また尾州徳川家の庖丁は無銘長さ八寸、此分には刃を透してある、名古屋の天守閣より出た物と云ふ傳來である、さうして見れば大阪城の物であつたかも知れぬ、元和元年大阪落城の時焼殘た刀劍類をば、取敢ず名古屋へ送つて天守へ納め、其儘になつて居て家康薨去したから、自然尾張家の道具になつた物だとも云ふ。これも其一種ではなからうか、次に忍の松平家の庖丁だが、是も無銘で七寸三分、幅一寸一分、此庖丁は慶長五年安國寺が加茂川堤にて生捕になつた時、差料にして居たのを鳥居右京進の家來、鳥居庄右衛門が、安國寺を縛し、其佩刀を奪て二條の城へ差出した、其時庖丁は鳥居家へ納めた、どう云ふ譯で忍の松平家へ傳つたものか分らぬが現に同家にある。

此等の庖丁正宗は、料理の爲に造つたのでは決してない、其形狀が庖丁に似て居るから庖丁と異名を付たもので、其證據は内藤家の庖丁も

其元は蒲生氏郷より其子飛騨守秀行に傳り、其よりまた其子の下野守忠郷に傳りしもので、金無垢の三枚刃が付てゐる、全くの佩刀である、四條流の鯉の庖丁も見た事があるが、其庖丁は全く一定の形があつて、短刀見た様なものではなかつた。

▲夫馬正宗 大名の家にも随分如何はしいお刀がある、昔より本阿彌がチャンと作家を極め、折紙なり、添狀なり附けた刀ですら、今日十分に研究して見ると、飛んだ相違を生ずる例が多いから、先祖から斯様に申傳たなど、云つた處が、ソレは其家の内だけの事で、天下の公評に掛けてはさう計り參らぬ、幕府時代でも澤山其例がある、譬へば本阿彌を招ぎ是は當家先祖より持傳へたる正宗であるが、鑑定致すやうにと命せらるゝ、其時本阿彌が其刀を見てコレは正宗ではない、餘程等の下る刀だと思つても明言する譯にはゆかぬ、これは正宗では無い相州物には相違無之候へども、末の廣正か綱廣位に候杯と言はふものなら、必ず

立腹して不届な奴だ、此は正しく何々院様東照宮より拜領の五郎入道である杯と散々に叱り飛される、叱られて濟ばよいが氣短な殿様に出逢へば、吾家の道具へ疵付たり、切て捨る杯と來るから耐らない、ソコで本阿彌一家では一ツの遁路が拵へてある、其刀を見て添狀を書けと言ふ、と直ぐ御傳來の御刀拜見仕候處正宗と相見へ申候代金何百枚の代付も可有之など、書く、之を御傳來物と云ふ、今日でも御傳來物が澤山ある、であるから添狀があつても折紙があつてもソレを悉く信ずる譯にゆかぬ、悉く折紙を信せば時に鑑定なきに如すと云ふ譯だ、其例に引くは恐れ多いが帝室御物の夫馬正宗の事を以てお話を致さう。

夫馬正宗は八寸九分半の短刀である、此刀は最初丹羽五郎左衛門長重が所持して居たのを、前田中納言利長が所望して黄金三百枚で買取た、然るにどう云ふ譯か前田家で此正宗が氣に入らぬ、最初は良い積りで有たらうが段々吟味をして見ると、正宗では有まいと云ふ評も聞え

る。ソコで本阿彌光甫に託し、誰人にも望みの者あらば譲渡したいと云ふ事で、光甫より加藤左馬助嘉明に話た處が、ソレは求めたいものだと云ふ事で、光甫が中間に在て二百七十五枚で加藤家の物となつた。維新の後、今上陛下刀劍を愛させ給ふ由隠れなければ御慰みにもと加藤家より此夫馬正宗を献上して、初て御物になつた。其後明治廿年頃か御物の名刀も段々御品数多くなつて、御劍係を置れ、本阿彌初め斯道の鑑定に名ある人々を召れて、御物の御拭ひもあり、鑑定家の調査もあつた時、陛下より富小路侍従を以て、御物の御劍の中に眞偽の如何はしき物もあらば、少も忌憚なく審査を遂げ、正しき物へは番號等を附し、内庫に保存すべしとの御沙汰があつた。此に於て富小路侍従係長となり、當時の鑑定家大竹、今村、竹中の諸氏外に本阿彌三人、其外にも有たらうが、一刀づゝ詳細に審査を遂げて、正しき筋の物は番號を附して御函に納めたが、其時番外になつた刀劍が多少ある、先帝の御持になつた行光

の短刀及び例の夫馬正宗なども此内にあつた。此時は審査員中大きに議論があつたらしい、大竹と云ふ人が第一はこの夫馬は信國かも知れぬと言ひ出し、今村氏之に賛成し、たとへ正宗にもせよ斯様に大疵のある短刀は番外で然るべしと云ふ論だ、本阿彌連中は吾先祖が正宗と極めて加藤家へ周旋した道具を、子孫として否認する事も出来ぬから、何れも原案維持だ、が遂に多數決で番外と極めたのである、西垣子、杯も當時原案維持に外ながら賛成で、今村、別役、兩氏などを攻撃した仲間である、此の時正宗にあらず、正宗なりと云ふ争議が世上に聞こえて、讀賣新聞が正宗はない人であると云ふ事を書出し、其の説は今村氏が主張せし如く書立て、一時大評判となつたが、今村氏の説は夫馬正宗に就ての意見で、總ての正宗を否認したのではない、右の如く三百年間本阿彌が保証した正宗ですら、十分の審査をするとあやしく成て来る、御物ですら斯の如しだ、また一例は大徳川家にある小手切正宗で、此刀は初め貞宗

とあつた、佐野修理太夫の手に入つて正宗となり、前田(加賀)家で之を求めたのち行光に極り、その後また正宗と復した、確乎動す可らざる標準のある譯ではなく、斯様の事は世上にいくらもある事である。

▲三光の切れ味 應永備前の三光と呼ぶは康光、則光、清光の三作であるが、誰も康光を以て一位に置くが、則光、清光共に初代は皆業物である、播磨の赤松入道、康光に五十振の太刀を打せ、五十人の壯士に授けて切て出るに、向ふ處切靡けすと云ふ事なしと、赤松記にある、蒲生氏郷好んで康光を帯びたと云ふ話もある、三河古物語に本田某康光の刀を以て躍り出で、登り来る敵の槍の柄を捕へ打下ろせば、兜の吹返しかけて敵の顔を斜に切落し、餘す刀にて槍の柄を切斷つとあり、斯様の話はいくらもある。また則光に就ては仙臺の石川彌兵衛、長船の則光の刀を以て敵を切る事七十餘人、其外辻斬、手打數知れず、この則光長さ二尺七寸あり、子孫代々持傳へたれど、此刀にて人をあやめし者代々ありて、祿

五百石削られ、二百五十石となり、後に悦之進と云ふ者、東山折壁町にて十一人を切て石川の家斷絶に及ぶ。この則光にて悦之進が人を切りたるを見た人の話に、六尺棒持て打てかゝりたる人を、一打に打下せば棒は二ッに切れて、其者は大袈裟に切り割られ、悦之進刀を引た後に、其者二ッに成て倒れたと云ふ。清光もまた名譽の話がある、中仙道熊谷にて北國の侍、馬士が無禮したりとて立腹し、打捨るぞと呵れば、馬士鋤と云ふ者打振て、一打にせんとかゝるを、其侍刀を抜て切付たるに、馬士の持た鋤の半より二ッに切落し、餘る切先に二の腕を切て落す、馬士驚て逃出すを、後ろ袈裟に一太刀にて真二ッにしたりと、中村大輔の話に、刀即ち清光にて、中村が親戚某の家にと云ふことだ、この時及少しコボレたるは、鋤の鐵の部を切落したる爲なりと云ふ。勝安房君の話に、薩摩の男に自分が清光を遣つたことがある、其男長州へいつて居て石州口で戦た時、清光で三人斬たが、少も手こたへなく、スラリとした切れ味

清光はこれ程の業物とは知らなかつたと禮を言てよこしたと吾等に話した事がある、今古刀を愛す人は大銘ものこのみ目を着けるが、三光あたりの刀も決して軽すべき物ではない、モシ新名物牒を編輯したなら三光は差向き上段に位するで有う。

▲細川の新藤吾 細川忠興二代將軍より新藤吾國光の刀を賜り本阿彌光徳に命じ、金象眼にて銘を入れて所持したのを仔細おつて忠興より高丸資慶卿へ贈つた處、其後鳥尤より再び忠興の孫丹後守行孝宇土の城主三萬石忠興の二男立孝の子也へ贈たから、其刀を本阿彌光温に見せた處が、これは何と致しても新藤吾とは鑑定し難し、相州の廣次にて候と言ひ出したので、行孝も其言を信じ象眼を摺落し、廣次で所持して居て、後又本阿彌光甫に見せると光甫はつくづくと見て、此御刀は象眼にて新藤吾と銘を入れたる御道具である、私十六歳の頃光徳の御刀、象眼を入れ、私に研せ候故、確と心に覺え居候、年數あまた立た

れども今以て相忘れず、何方へ参り候やと日頃心掛候は、さて久しぶりにて拜見仕り候、光温が廣次と極め申たりとは、近頃残念の至り何とぞ昔の如く新藤吾に遊ばし下さるべしと云はれた由、本阿彌にもこんな事がある、本職にても鑑定と云ふものは素より確とした標準のある譯ではないから、愈忽の事がないとも言れぬ、況や今の生鑑定先生をやである。

▲山田の虎徹 幕府の御試御用を勤めた山田淺右衛門吉陸が愛刀に、長曾根虎徹入道與里を切つた刀が、おつた、俗にハネ虎と云ふ銘振りで、長さ二尺三寸三分半反り三半分及は小亂で常とは出来替り、尤も刃味よく、最上の切物である、天保二年西丸御留守居を勤めて居た戸川中務少輔が頻りに懇望したから、山田も謝愛して戸川に贈つた處、其挨拶として金二十兩、別に狩野探幽筆の福祿壽の大幅を二重箱に入れたのを添へ、また肴料として黄金一枚七兩三分を贈つた、この刀は古今鍛

治備考第五卷三十八丁に押形が出て居る、三刀出て居る二本目の虎の刃が、上へ向つて根の字の中程までネへて居る、目貫穴が二ッあるのが、れそだ虎徹と云ふ刀は新刀中の上々作大業物だけに偽物が至て多い、先年虎徹會をした時に、百七八十本も出たが、いかにも是が眞の虎徹で有らうと感嘆した物は、三分の一許りしかなかつた、華族より出たのが七八口あつたが、ソレは皆よろしい刀劍所藏家を以て自ら任ずる人々の虎徹でも、ダマが多いから眞物は至つて少いものと思はねばならぬ、吾等が友人の某といふ者至て刀好きなれど、鑑定に掛てはまだ覺束ない處がある、ある時常陸邊へ旅行して虎徹の刀を見て、心中に欲く思つたけれど、是迄三四度も偽物を求めて後悔したことがある爲め控へた。

▲河田子爵 が赤坂新坂上に居た時、吾等度々參つて歴史談をなし、子爵の經歷話を聞たことがある、此の人は誰も知る通り劍道の達人で邸内に道場があつて、至て刀劍好で正宗だと言ふ刀を持って居る、此刀は

有栖川宮より拜領であると常に秘藏して居た。吾等は正宗かどうか判断は出来ぬが先づ良い刀である。其から尤も好で求めるのが和泉守兼定で子爵が言ふには折れもせず曲りもせず、さうして人を切て瓜を割るが如く切れるのは之定であると常々言れた、之定も七八振持て居た、景與君吾等を招れたから直に參た處、今日古い兜の鉢を求たから刀で試て見やうと思ふと言ふ、何のお刀でやりますかと問へば、されば此兼定は秘藏第一の物で已に自分が度々人を切て試したから、今更試す迄もない、先づ見給へと言ひながら、青金襴の袋より取出した白鞘二字銘の兼定二尺三寸餘と記憶する。景與君が云ふ、明治元年自分は因州の兵を率ゐて上野を攻撃したが、吾一隊は下谷口より攻入る筈で、自分は百人許り率ゐて雁鍋の二階へ上つて山王臺を砲撃した、三枚橋よりは薩州が攻入る、其時抜刀隊三十人許り引つれ山へ飛込で血戦したが、清水の観音の前で二人斬た、随分見事に切れた、即ち此刀で、其のち宇都宮攻

撃の時も斬たが大袈裟をやつて見たと甚だ得意な話があつて、また無銘の古刀を出して此刀を一ツ鑑定して見ると云ふ、長二尺四寸許り、小丁子の亂刃で品格があつて反りも高い、勿論摺上もの少し、スガレて居る、これは古備前では有まいかと言ふと、さうだ古備前でもない、古備前なら誰へ持てゆくかと言ふから、分らない、友成程の鐵ではなし、正恒でもなからう、斯様の刀は誰と極めた處が想像に過ぎない、古備前と極めただけでよいですと言たら、此刀で兜をやつて見やうと直に酒を呼び、五六盃傾けて兜を臺へのせ、其古刀を以て立向つた、刀を取た姿勢甚だ立派で居合腰で上段からヤツと矢聲をかけて打下ろした、頭形の兜の正面三寸許り見事に切割た、スルト其刀がスーと上へ反て仕舞た、反りの十分ある上に又反た、河田子爵も驚いてコレは失策たとう／＼廢物にしたと打笑て其場は濟だ一ヶ月程経て訪問すると其刀を出して見せたからよく見ると反が舊の如くに直り、刃もコボレてゐない、是は不思議

議な事だと聞て見ると、あの時から毎夕一盃傾ながら此刀を打振り打振り楽しんで居た、十四五日もさう致して居る中に、舊の姿に立直た、古刀の鍊ひの良いものは斯う云ふ妙があるを語つて至極喜んで居た、これも十五年の昔話で子爵も今は故人である。

▲人切り平内 淺草の観音境内に久米平内の石像がある、參詣する男女も澤山ある様子だが、平内に願を掛るなら、どうぞ人殺しの上手に成る様にと願はねばならぬ、平内は即ち人を切る事と搦取る事が名人で、お抱になつたのだ、幕府の頃、青山主膳と云ふ御徒先頭加役として、盜賊改を命せられたが、此主膳盜賊改となつてより、悪者ども大に怖れて其當分は盜難も至つて少くなつたと云ふ話、夫と云ふも當時浪人に久米平内と云ふ者があつて、諸國を武者修業して劍術取手の名人と云ふ噂高く、平内に向ふ者で斬られぬ者はない、青山主膳之を聞て左様の者を召抱てこそ御用も勤る譯と平内を用人格に召抱て、盜賊方を申付



たるに素より力量すぐれ、太刀打早業の達人なれば、功名をあらはさずと言ふ事なし、其時代は死囚の打ち首は非人の役としてあつたが、青山の時より平内が切る事になり、ソレより山田淺右衛門の役となつたので、平内が切た首數二千に滿ち、首塚二度建て供養をしたと云ふ。天和三年に死で遺言にて吾死なば吾像を人の多く集る所へ建よ、吾生前に人を殺したる罪を滅するため、洒し者になるべしと言置き、秘藏した刀を抱て眠るが如く往生したと云ふが、さて此刀は定て大業物で有うといろく穿鑿して見たが分らない、小宮山南梁翁が話に、久米の平内は居合をよく抜て三尺五寸の刀を座て居て抜た、平内が常の差料は宇多の國宗であると云つたが此刀かも知れない。

▲之定の切味 信田歌之助が言ふには、明治元年の春官軍が江戸へ下つて、關東八州は蜂の巢を破つた様に亂れ幕府の歩兵は房州から上總、下總へかけて脱走する、之を追討の官軍も追々出張する頃、下總の

流山から松戸小金邊に博徒ども其處此處に集つて強盜を働き、人民大に難儀する由を聞て、山岡鐵太郎先生が、昨今上様水戸に御謹慎中なるに、斯う世上が騒が敷ては困る、君は小金、流山邊の暴徒どもを鎮撫して呉れ、場合に依つては斬て捨ててもよいと云ふから、ソコで、成川(のち尙義)と云ふ帝商の頭取で歿した)と共に三十人許りの部下を率て出掛た、松戸の渡しを越えて開た處、小金の茶屋に三十人許りも集つて居ると云ふから、直ぐ押てゆくと、宿外れの立場茶屋に酒を飲で居ると云ふ、能く聞けば今夜強盜に這入る仕度中だと云ふ、ソコで宿の中の旅亭に休息して、成川に部下を託し探偵かたぐい僕一人密かにいつて見ると六尺許りの路地を入た奥の家に廿人許り酒盛して居た、其から空敷歸るでもない、追散らして遣らう、先づ二三人切つてやらうと路地を飛入りながら、己れ等何の爲に斯く集り居るぞと聲をかけ一人斬倒した、彼等大に驚きうろたへ騒ぐ處を、其場で五人斬て裏の畑へ逃出す奴を追かけ

て、又二人斬倒した、此時差して居た刀は和泉守兼定で豫て業物とは聞て居るが、斯う瓜を斬る様に手障りもなく斬れるとは知らなかつた、是で残た奴どもは悉く逃げたから、往來へ出て刀を拭て居ると、南の方より馬に乗つた侍が編笠を冠り、白い袴を穿てやつて來た、見ると山岡先生で、ヤア先生どちらへと聲を掛ると、水戸へ急用が出來て行くのだ、今澤山斬た様子だが其刀はよく斬れると見ゆる、誰の作ですかと聞かれるから、之定ですと答えた、切れる筈だと言ながら水戸の方へ馬を早めてゆかれた、其兼定も友人に賣て仕舞たと話された。

▲川村軍兵衛 天保の頃村川軍兵衛と云ふ人が江戸にて朋友と喧嘩をし立ろに其者を討果して屋敷を立退た、然るに其殺された者の弟と親類とが申合せて六人で軍兵衛を搜索し初めた、軍兵衛は五月の中旬猿若町へ芝居見物に行き、夜に入りて一人ふらふら歸つて來ると、淺草の町で突然六人が現はれ出で、取圍んだ軍兵衛は直に一刀を引

抜いて直に一人斬倒し續て其場へ五人とも切り捨てた處が一人だけは天水桶の陰に隠れたのを一刀で桶の端を切割つて餘す刀で肩先八寸切つたと云ふ、此刀は備前祐定二尺四寸と云ふ事である、裏銘はないと云ふ事だ評判が高くなつて是が爲め軍兵衛は紀州徳川家へ二百石で召出さるゝに至つた。

▲海後氏の談 櫻田の一舉に與みして、小指を切落され其場から水戸へ逃げて、明治廿四五年まで存命した、海後嵯峨介といふ人の話に切り合ひをしては祐定がよい、及はコボれるが切れる事は受合だ、關の孫六などは高いから容易に手に入らぬ、祐定なれば十兩位でも相應なものが手に入る、櫻田の時も祐定が三本あつたと記憶する、一人も刀の折れた者はない、随分烈しい切合で鏢と鏢がカナリと當たる程手詰めでやつから、吾がさして居た刀なども及がコボれたと先年予に話された事がある、又其後同氏の云ふには祐定で横山上野大掾と云ふのが餘

程の業物だと關鐵之介が話した事がある、左様云ふ刀はまだ見た事がない、今は定めて安く手に入らうから、上野大塚が有らば欲しいものであると思ふと云はれた事がある。

▲留守居の刀 舊幕時代大名の留守居と云ふ者は外交専門で、多分の交際費を使ふから、萬事贅澤を極たものだ、其お留守居が芝の賣茶亭へ集會した時、本阿彌平十郎を呼んで、佩刀の鑑定をさせた事がある、此時お留守居の侍は三十人許りで、雲州のお留守居が上席、何れも立派な拵の刀であるが、拵のピカ／＼と光る刀は中身が思ひの外劣る、拵への質素な古いものには名作がある、三十人で殆ど六十本許りの刀を出した、其中で良いのが備前の康光、其から關の兼法、繁慶、堀川の國安、五字忠吉、この五腰で其より井上眞改、仙臺の國包の二本を加へ、皆百兩以上の品と申ました、古刀は至て少く、其外は水心子、兼若、兼繩、是一、吉道、同田貫など皆な中位の刀で有ると言れたが、今日では此程の物も六十本揃へ

る事は容易では有るまい。

▲紛失せし名物 史乘に記された名物の刀で、遂に所在の知れぬ物が多い、中にも何とかして搜索して見たいものと思ふは、名物牒にある大兼光である、是は所在分らずと記してある、また武田代竹の郷義弘、光徳の押形にあるが、此押形は大阪城に在た時の事で、其後は何處にあるとも分らぬ、赤松家重代の大わッぱと云ふ太刀は、備前助平の作で、京の「みぞろ池」にて大童子と云ふ強盜を切た物である、のち別所家の重寶となつたが、其跡は分らぬ、其から駿河の今川家に傳はつた八々王國吉と云ふ名刀が分らぬ、是は今川で最も大切の刀である、又里見家重代の大キッ方、小キッ方と云ふ二振の太刀が、永祿五年鴻の臺合戦の時紛失して居る、小弓の御所足利義明の太刀、國吉作の面影と云ふ太刀も、鴻の臺合戦後所在分らず、近くは水戸の老臣鈴木石見守家、斷絶の際、長谷部と二字國俊の二刀が紛失して居る、是は有名のものであるから、搜した

いものと故老の人が常に言はれてゐるが未だ分らないでゐる。

### ▲會津の二作

世に會津の五鍛冶と云ふ古川近江大掾兼定、三善

陸奥大掾長道、下坂甚兵衛爲利、鈴木半兵衛兼友、中條若狭守道辰、この五人は上手の方であるが、其の中に世上に聞えたのが兼定と長道の二人である。兼定の初代は關の和泉守兼定の男、古川清左衛門と呼ぶ、會津に下り、華名家の抱鍛冶となる。二代目兼定は慶長年中の人にて蒲生家の抱となり、三代目も會津に住し、四代目孫左衛門兼定、明暦の頃保科正之の抱となり、寛文に卒し五代目兼定、これが近江大掾となり、元祿より正徳まで存命である。此兼定鍛冶備考には業物の部に加へてないが、會津藩には名譽の傳説がある。また長道が其先祖伊豫松山の人で加藤左馬助嘉明會津へ入部の時、悴の正國と共に會津へ移つて加藤家の鍛冶となり、正國のち政國の子長道廿七歳で大阪に登り、津田助直に學び、また伊賀守金道に就て修業し、陸奥大掾を受領して會津へ下た。此時兼定の

名譽已に國內に聞えた時であるから、長道も彼と競争して益々腕を練たらしむ。保科正之二人を賞美して、常に此二人の鍛た刀を差料とし、諸侯にも吹聴せられた様子、ある時近臣より、二人に命を傳えて自作の刀一本づゝ携へて登城すべしと命じた。これは二人の刀を同時に試す積りである。二人やがて大書院の椽へ伺候すると、保科殿出られて今日は眞綿を以て兩人の刀を試す積りである。左様心得る様にと言ひ渡し、近習に命じ眞綿を束ねて臺に載せ、先兼定の刀を以て切らせたるに一向切れない。此刀刃肉が厚い故であらうと人々評した。次に長道の刀を以て試したるに見事切れた。長道大に面目を施し、兼定は甚だ憤懣に耐へず、下城の道すがら怒氣未だ鎮らず、黄金御門を通る時、大扉に打付たる鐵の差渡し、四寸もある大乳房を見て、矢聲を掛て、抜打に切割る。門番大に愕き、飛出して差押へ、厳しく詰問に及ぶと、今日のお試し餘り無念に存じ不圖不調法仕り候、御法の通り仰付られたく候と云ふ。其旨正之殿

聞てさも有べき筈の事なり、兼定の氣性天晴なり、斯る心掛あれば行末は猶上手名人ともなるものなれ、咎めに及ばずとて何の沙汰もない、内々其事江戸表へも申送られたれば兼定の名いよく世上に聞えたのである、兼定の子孫代々會津に住し、末葉兼定は明治三十七八年の頃歿した。

▲劍相物語 七八年前に故人になつた、重井夢南氏の話しに、阿部伊勢守老中上座にて權勢隆々たる時分、一夕觀月の會を催はし、老中には大久保加賀守、外に遠藤但馬守、堀田備中守、林大學頭初め十餘名の來客出入の旗下醫官など末席に列りて小宴を開き、世上の雜談に主客興に入りし頃、旗下の水野某進み出で、手前が同僚に劍相を能く仕る者が御座るが其觀相極で奇妙にして、其の効著しき由世上にても評判仕つり候、詰る處帶劍の吉凶を相して、腰刀の禍福を試みるので御座る、今夕の御慰みに御刀を相せしめ候てはいかゞのものにやと言出でたれば、

大久保相州其劍相の事は吾等も兼を聞及ぶたか、御主人の御許じからば是へ召よせて、各々の刀を見せてはいかゞと云へば、伊勢守吾等も評判を聞たる事あり、平夕の餘興にも相成れば幸の事なり、早々其仁を呼ぶべしとて、急に使を遣りたれば、劍相家大久保某直に推參して其席へ出れば、伊勢守足下は劍相の達人とやら聞く、この席の方々の帶刀を相て、吉凶を申されよとあれば、畏り候と恭しく席を説は、先づ主人の脇差よりして廿人餘りの來客の刀を一々相し、是は至て善相の御刀、これは凶相、御差料には相成らず、是は吉凶相半いたした御刀と、辯舌明に利害を解て酒々と述る、一座皆感入て、敬服の様子、末に至て伊勢守が近習某の刀を見て、これは以ての外凶相、此の刀は必ず主君に祟をなす相あり、決して帯び給ふ可らずと言ひたれば、一座皆大に驚く、其時近習の某が云ふには、この刀は祖父より傳來の刀にして、父臨終の際に之を汝に譲るぞ、此刀をば吾と思ひて忠孝を勵めと、呉々も申したる品に候、い

かに凶相にもせよ、只今身を放す事存じもよらずと答ふれば、劍相家、以ての外に顔色を變じ、足下は御主君の身に祟る刀を帶らるゝ所存なるや、御手前の都合よければ、御主君の御安危は顧みぬ御心得なるやと急度言へば、近習の某莞爾と笑て、抑々劍相と申すこと、昔は聞きも及ばぬ事なるに、何時のころより初まりたるや、吾々は左様の事一向に信用仕らず、傳へ承る、天子第一の御寶は三種神器と申し、其の第一は御劍の由、御歴代の御寶とある上は、劍相も此上なき吉相の御劍なるべきに、安徳天皇は其御劍を帯びて入水したものと承る、また將軍家第一の御寶刀は本庄正宗の御刀と聞く、この刀酒田の城主何某の右馬助と云ふ者の佩刀にて、此刀にて上杉の本庄氏へ切付け、其場で戦死いたし候由、さすれば持主に祟りたる凶相の刀なり、此凶相の刀が將軍御代々の御寶刀とはいかなる譯に候や、刀と云ふものは君を守護し、また一身を護る道具なれば、持主の心掛忠義を存すれば、刀も忠義の爲に働き、持主邪念不

道なれば、刀は悪き方に働き申すべし、刀に善悪はなくして、持主の心に善悪ありと、兼々心得罷在る故、吾々は劍相など少しも信用仕らずと、懾りもなく述べたれば、一座大に白けて皆興の覺たる體であつた。伊勢守近習を咎め、若輩の身として入らざる申分、退け、まかり立てと、其席を追出し程よく、其場を繕つて、宴席は果てた、さて來客皆々散會した、後用人が罷出で、近習某御客人の御席にて不調法仕り、恐入た次第、閉門仰付らるべきやと云ふと、伊勢守、イヤ、其には及ばぬ、彼が言ふ處至極尤の事じや、劍相と云ふこと、當節流行はいたせど、實は埒もない事、彼が申す通り、刀に吉凶はない、今夜は一時の座興に劍相の話聞いたまでの事少しも不調法ではない、實は若年の者には感心なる心懸と、内々褒て居る處じやと言れて、用人も安心して退いた、惜いかな、此近習の名を聞漏したと云ふ事である、昔は劍相ばかりではない、墓相と云つて、墓の形狀位置、方位などに吉凶を付て、愚人を驚かして金を取たもので、家相など

は今でも氣にして騒ぐ連中があるが、劍相だけは廢刀の令と共に跡を絶たのである。

刀劍談 終

明治四十三年六月七日印刷  
明治四十三年六月十日發行

刀劍談(附)  
正價金八拾錢

著者 羽 阜 隱

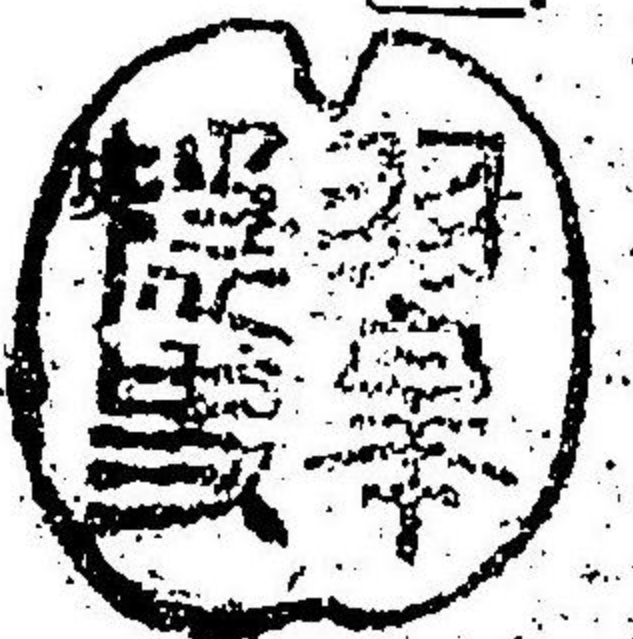
發行者 清水 孝 教  
東京市麴町區有樂町二丁目一番地

印刷者 松本 龜太郎  
東京市神田區錦町三丁目廿三番地

印刷所 五 彩 閣  
東京市神田區錦町三丁目廿三番地

不許複製

發兌元  
發賣所  
東京市麴町區有樂町二丁目一番地  
弘道館社  
東京市神田區猿樂町二番地



は今でも氣にして騒ぐ連中があるが劍相だけは廢刀の令と共に跡を絶たのである。

刀劍談 終

明治四十三年六月七日印刷  
明治四十三年六月十日發行

刀劍談(奥附)  
正價金八拾錢

著者 羽 阜 隱

發行者 清水 孝 教

印刷者 松本 龜 太郎

印刷所 東京市神田區錦町三丁目廿三番地  
五 彩 閣



發兌元

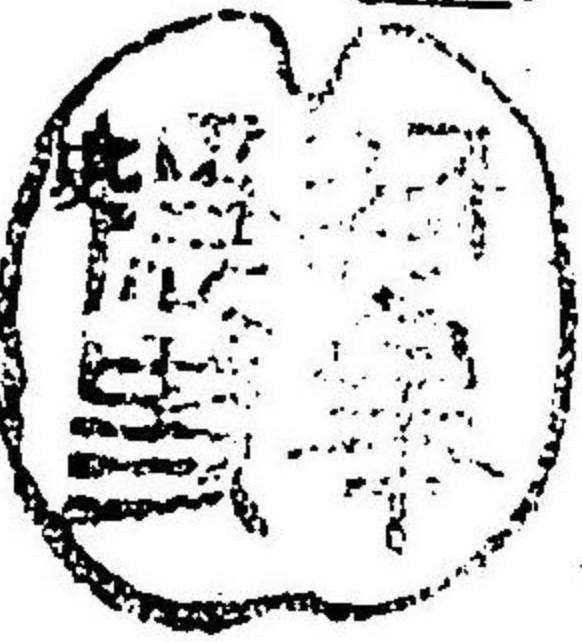
東京市麹町區有樂町二丁目一番地

日 報 社

發賣所

東京市神田區猿樂町二番地

弘 道 館





近刊豫告

羽阜隱史著

刀劍談補遺

橘村野史編

刀劍全書

發行所

日報社

# 賜天覽台覽

|      |          |          |
|------|----------|----------|
| 候爵   | 久我通久君題字  | 山路愛山君序文  |
| 伯爵   | 東久世通禧君題字 | 木村鷹太郎君序文 |
| 文學博士 | 三上參次君序文  | 大町桂月君序文  |
| 文學博士 | 芳賀矢一君序文  | 清水橘村君編著  |

## 東京朝日新聞所載

第四版

家庭訓話

### 今日の歴史

### 花の巻

#### ●本書の目的と價值

- 第一、小學校中學校に於ける修身歴史教授上の資料
- 第二、家庭に於ける教育訓話の材料
- 第三、青年の自省録
- 第四、少年少女の讀物
- 第五、通俗世界歴史と偉人言行録

#### 大阪朝日新聞批評

洋裝菊版總布製  
口繪插畫寫真銅版  
木版密書百餘個  
紙數四百五十餘頁  
定價金一圓五十錢  
郵税金十二錢

東京朝日紙上に連載されし「今日の歴史」は教育ある家庭の讀物として歓迎されしが、今回三卷に分ちて出版せられ既に第一卷（花の巻）を出來せり、三百六十五日如何なる日も偉人の生れし歴史を有せぬ日とて無く、如何なる日も偉人の逝きし歴史を持たぬはなき造化が後人の爲め日々奮勵の種を與ふる用意とも見るべし、たゞ本邦には日々斯る追懷のた

橘村野史編

發行所

報

# 刀劍全書

社

## 賜天覽台覽

侯爵 久我通久君題字 山路愛山君序文  
 伯爵 東久世通禧君題字 木村鷹太郎君序文  
 文學博士 三上參次君序文 大町桂月君序文  
 文學博士 芳賀矢一君序文 清水橘村君編著

### 東京朝日新聞所載

第四版

家庭訓話

## 今日の歴史

花の巻

### ●本書の目的と價值

- 第一、小學校中學校に於ける修身歴史教授上の資料
- 第二、家庭に於ける教育訓話の材料
- 第三、青年の自省録
- 第四、少年少女の讀物
- 第五、通俗世界歴史と偉人言行録

### 大阪朝日新聞批評

東京朝日紙上に連載されし〔今日の歴史〕は教育ある家庭の讀物として歡迎されしが、今回三巻に分ちて出版せられ既に第一卷（花の巻）を出來せり、三百六十五日如何なる日も偉人の生れし歴史を有せぬ日とて無く、如何なる日も偉人の逝きし歴史を持たぬはなき造化が後人の爲め日々奮勵の種を興ふる用意とも見るべし、たゞ本邦には日々斯る追懐のたよりと爲すべき恰好の書物を飲さしより西洋に行はるゝ偉人曆の類の我邦に行はれん事を望む者多かりしが、本書が此の需要を充たすべく先登第一に現はれしは喜ばしき限なり、如何なる家庭も此の一本を備へて子弟をして日々一定の時間に其日の項を熟讀せしめ猶父兄より更らに面白く可笑く訓話するやうの事を試みるならば、精神教育の上に多大の効果あるべきは疑ひなし本書は體裁も優雅にして人物の寫真なども乏しからず日本及び東洋の材料を好く配合したれば件の目的を充すに遺憾なし

洋裝菊版總布製  
 口繪挿畫寫眞銅版  
 木版密畫百餘個  
 紙數四百五十餘頁  
 定價金一圓五十錢  
 郵税金十二錢

### 豫告

月

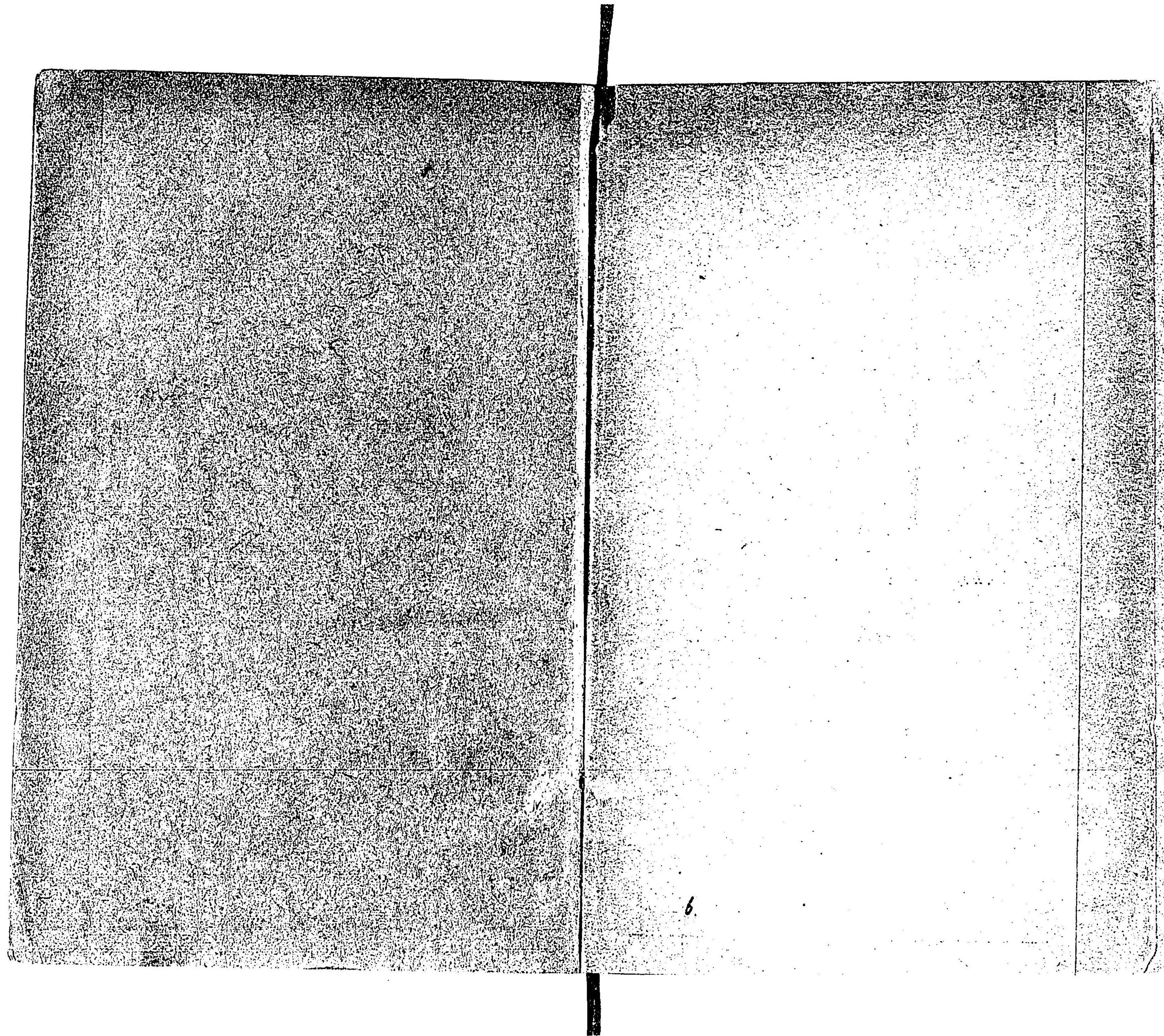
卷

雪

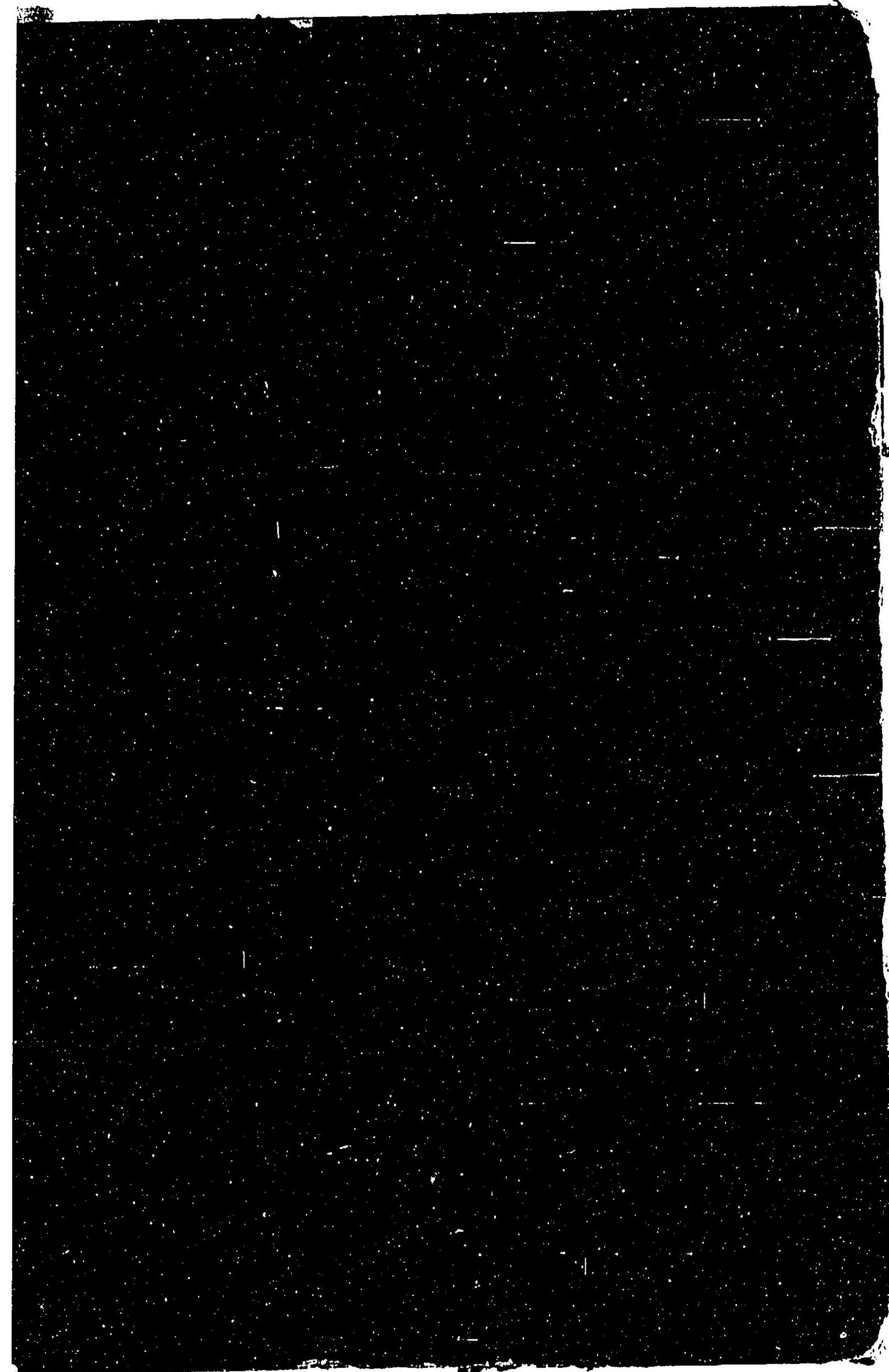
菊版上製ふりかな附約五百頁  
 製本中  
 近刊  
 菊版上製ふりかな附約五百頁

### 弘道館

東京神田猿樂町二番地  
 振替番號 一 二 二 一 一



96  
178



96  
478

072235-000-6

96-478

刀劍談

羽阜 隱史 / 著

M43

CEF-0134



